就労支援施設利用を促す中間的役割としての稲作ケアの可能性

○鳥島 佳祐（医療法人常心会 川室記念病院　作業療法士）
宇良 千秋・岡村 毅（東京都健康長寿医療センター）
藤野 未里（医療法人高田西城会 高田西城病院）
烏帽子田 彰・川室 優（医療法人常心会 川室記念病院）

１　はじめに

我が医療法人川室記念病院(以下「当院」という。)では稲作ケアプログラム（以下「稲作ケア」という。）を実施している。稲作ケアでは、精神障害及び認知症の患者や利用者を対象とし、田んぼや畑での作業を重点的に地域住民ボランティアの方と共同で実施している。この稲作ケアに参加したグループホーム在住のメンバーから、就労支援施設利用に繋がった症例があった。

２　目的

本研究では、稲作ケアが精神障害の人たちの就労支援施設利用を促す中間的役割としての可能性があるかどうかを症例を通して検証する。

３　対象及び方法

① 対象：当院の入院患者及び通所患者15名程度。
② 方法：週に１回、90分のプログラムを計25回。プログラム実施後に参加時の感想を述べる。
③ スタッフ配置：医師、作業療法士、心理師、地域ボランティア(精神科看護師経験有)を配置。
④ 作業内容：田んぼでの田植え・畔の整備・江立て・草取り・稲刈り、畑での苗植え・草取り・石取り・収穫などを行う。

４　症例紹介

① 氏名：A氏
② 年齢：20代
③ 性別：男性
④ 診断名：発達障害、統合失調症疑い
⑤ 入院歴：他院にて３回の入院歴あり。退院後グループホームにて生活されている。
⑥ 病前性格：気が小さい、心配性、内気。
⑦ 問題的行動：思い通りにならないと威圧的となり、物を投げる、特定のメンバーに嫌みを言い、からかう、執拗に同じ質問を話す行動有。
⑧ 農作業経験：ほぼ経験はない。小学校時の授業のみ。
⑨ 第１印象：対人面において他人と距離感の取り方が困難な様子。好意を向けている相手には饒舌で場に相応しくない言動も見られた。それ以外では自閉的で静かに説明を受ける様子もうかがえた。

５　稲作ケアプログラム時の様子

関わりにおいて初期、中期、後期の工程に分けて紹介する。また介入開始時期からX年Y月とする。

(1) 初期（X年Y月～X年Y＋２ヶ月）

自己紹介時において、俯きながら参加者に挨拶を行い、人見知り的な態度が顕著であった。稲作ケアに参加されていても、スタッフと視線を合わせることが困難な様子であった。しかしプログラムに参加する特定のメンバーとは、自ら話しかける言動が見られた。作業に関しては、受動的で、こちらの指示を受けながら淡々とこなす姿が見られた。

感想では「疲れた」「まあまあだった」と簡単な一言を述べ、ややネガティブな発言内容であった。

(2) 中期（X年Y＋２ヶ月～X年Y＋４ヶ月）

作業量や参加メンバーに慣れてきた時期。初期と比較すると、自らスタッフやメンバーに挨拶や日常的会話を行う姿が見られるようになってきた。活動においても、受動的な態度に変化はないが、元気よく畑の草取りや、作物の収穫、運搬に取り組む様子が窺え、笑顔が見られるなど表情の変化が多く見受けられる機会が増えた。

感想でも、「暑い時間だったけど楽しかった」「次の収穫が楽しみ」とポジティブな感情表現が示された。

(3) 後期（X年Y＋４ヶ月～X年Y＋７ヶ月）

稲作ケアにおいて、意欲的に取り組み、自発的な参加が見られた時期。スタッフやメンバーに挨拶や日常的な会話以外にも、高齢なメンバーに対して「大丈夫ですか、手伝いましょうか」と心配するような声かけや「次に何をしたらいいですか」と自発的にスタッフに確認する様子が見られた。スタッフやメンバーに対しても適切な距離感で対応し、ムードメーカー的な役割を担っていた。

感想では「楽しく過ごすことができました」「来年もぜひ参加したいです」と集団内でハキハキと自信を持った発言が聞かれた。

６　考察

(1) 初期～中期にかけて

初期から中期にかけて、大きく行動が変容した部分は、ポジティブな感情表現が現れた事である。その背景として、

稲作ケアのプログラムに、週に１度、毎回休むことなく、継続して参加でき、対人場面での体験が得られた事が一因であると考える。毎回参加した事により、スタッフやメンバーと次第に顔なじみという関係性となり、プログラム毎に親交が深まったと考えられる。またA氏は、他の参加メンバーより年齢が若く、高齢のメンバーや地域ボランティアの方からもよく話しかけられていたりと、受け入れられていたことによって、プログラム自体の居心地の良さ、安心感を得られる場所となり、自身の肯定感へと繋がり、自らの発言にも自信が付き始め、ポジティブな表現、態度に変容していったのではないかと考える。

しかし、農作業については初期から中期にかけて、受動的な様子であったことについては、農作業経験があまり無いことから、作業内容が把握できずにいたのではないかと考える。しかし、作業についての自信はまだついてはいないものの、作業自体に対しては「楽しい」という感想が聞かれたため、正の感情が生まれていた。

この楽しいという正の感情について、今まで経験してこなかった農作業に対して、①身体を動かすこと、②仲間と共同しながら取り組むこと、③育てた物が収穫できることなどの要因が複合し、楽しいという感情が生まれたと考える。そうした感情の現れにより、表情の明るさが言動に現れ、変容のきっかけになったと考えられる。

(2) 中期～後期にかけて

中期から後期にかけて、大きく行動が変容した部分は、意欲的で自発性が芽生えてきたことである。意欲・自発性の芽生えとして、集団としての凝集性が高まり、集団内においての自身の役割を認識することで得られたのではないかと考える。対象者の役割として、高齢のメンバーが多く参加する中、草取りや収穫物の運搬など体力を要する仕事を率先して取り組んでいた。

「山根[1]は自分が『あて』になる、他者から『あて』にされることが働く喜び、働く楽しみとなり、生きがいへとつながる。」「自分の存在が『あてになる』『あてにされる』ことがひとにもたらす力は大きい。」と述べている。このことから、A氏は他メンバーより年齢的な若さや基礎的な体力を『あて』にされ、役割をこなすことにより、働くということに対して、楽しみ、喜び、充実感の獲得を積み重ねたことから意欲性、自発性が行動に現れたと考える。

また地域ボランティアと関わり、対人関係も促進されたことにより、スタッフやメンバーに対しても、落ち着いてコミュニケーションが図れるようになったと考える。

(3) 全体を通して

就労支援施設利用にあたって医療施設から就労支援施設への移行というのは困難な場合も考えられる。「棚澤[2]は基礎的な体力や作業遂行能力、耐性、基本的な対人マナー、社会性等の就労準備性の見きわめも必要である。」と述べている。このことから、稲作ケアは草取りなどの作業を行いながら基礎的な体力・作業遂行能力を養い、メンバーやスタッフ、地域ボランティアと関わることで対人マナーを培うことができるプログラムといえるのではないか。そのため、稲作ケアは就労支援施設利用にあたっての就労準備性を整えることができると考える。

また今回のケースのように、退院後グループホームにて生活を送り、就労支援施設利用の前段階として、稲作ケアに参加したことにより、役割の認識や、基礎体力の向上、対人関係におけるコミュニケーション能力向上の一助、地域住民と関わるという社会参加の獲得などが得られた。

そのため、稲作ケアを就労支援施設利用準備の一つとして考えて参加することにより、入院患者や通所患者あるいはメンバーに促す際、中間的役割として提供することで、より就労支援施設利用がスムーズになると考える。また就労支援施設側のスタッフに向けても、参加時の状況確認や作業傾向などの情報を共有することで連携が図りやすく、定着に繋がるのではないかと考える。

７　結論

A氏は、稲作ケアを通して社会参加の機会を得ながら、集団内での役割を担い、それが自信を回復し、就労意欲が高まったと考えられた。稲作ケアが、精神障害者の社会参加を促進し、就労支援施設利用を促す中間的役割機能をもつ可能性が示唆された。

８　今後の展望

現在、海外・国内においても農業を中心としたケアや就労支援事業は拡大されてきている。そのため、この稲作ケアは農業に取り組む就労支援施設・事業との関係性が大きく、重要性が高まることが期待されている。そのため、今後は稲作ケアが精神障害や認知症患者の社会参加を促しQOLを高めるだけでなく、就労支援を促す可能性にも着目して、プログラムの提供を行っていきたい。

【参考文献】

1) 山根寛『就労支援と作業療法』，「精神障害と作業療法」三輪書店(1997)，p. 214
2) 棚澤直美『就労支援における作業療法の技術』「作業療法ジャーナル６月増刊号 vol. 43」三輪書店(2009)，p. 778

【連絡先】

鳥島 佳祐 医療法人常心会 川室記念病院
Tel：025-520-2021
e-mail：sagyouryouhou@kawamuro.net